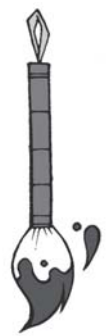


## 玉屋!! 鍵屋!! 鉄砲の火薬・ 花火の原料の硝酸は、実は…



下野市教育委員会 文化財課

また今年も、夏の花火大会の季節がやってきました。近年では、夏に限らず秋や冬、正月にも花火大会を行う地域もありますが、花火はいつ頃から行われていたのでしょうか？諸説様々ですが、花火は一般的に5世紀の中国(魏晉)で発明された、硝石(硝酸塩の混合物)と硫黄と炭を混ぜ燃焼と爆発が起こりやすくなった火薬と関係があるとされています。これらの火薬は良く燃えることで当初使用されましたが、次第に爆竹に似たものが造られました。この破裂し、光と爆音を発する火薬を用いた武器「てつほう・手榴弾のような炸裂弾」は、元寇(1274〜1281年)の時に使われ、『蒙古襲来絵詞』にも記されています。ちなみに2回目の弘安の役の際の六波羅大將は宇都宮貞綱で、6万人もの兵を率いて出陣しましたが、到着前に元軍は壊滅し戦闘には未参加の強運の人です。

また、ギリシャやローマ時代まで遡るとの説もあり、フビライが築いたモンゴル大帝国は、アジアのみならずヨーロッパにも迫りました。この時、ヨーロッパにも硝石が伝わり、武器として開発が進みました。1543年ポルトガル人が種子島に鉄砲を伝えましたが、これがその武器です。鉄砲に使用する火薬の原料である硝石は、鉱物として日本では産出しません。この硝石を製造するのはとても大変で様々な製法が研究されたようです。美濃や

加賀(現在の岐阜、富山、石川県)では良質の硝石(煙硝、塩硝)が生産されたといわれています。文献などによると、ひえ、たばこ、そば、蚕の糞、人の尿と土を混ぜ腐敗させ、更に糞尿を加え時折混ぜます。この作業が非常に臭く辛いものだったようです。これを3〜5年繰り返し固まった表面の土を集めて煮詰め乾燥させ硝石としました。

観賞用の花火は14世紀にイタリアのフィレンツェで、キリスト教の祝祭礼に使用されたのが始まりといわれています。日本では、1589年に伊達政宗が山形の米沢城で中国人が献上した花火が最初とも、1613年駿府城に徳川家康を訪問したイギリス人が手筒花火を献上したのが最初とも、家康が天下統一後に三河の鉄砲衆に娯楽用の花火を造らせた(三河花火)が発祥ともいわれています。家康の家臣団には伊賀・甲賀の忍びの者が多くおり、火薬を使う熟練の技術と知識を持っていたのかもしれない。後に江戸の町の完成とともに江戸に上・下屋敷を持つ諸大名も花火を競ってあげるようになります。

1658年(万治元年)、大和国(奈良県)の現在の五条町から江戸に出てきた初代鍵屋弥兵衛が、幕府の狼煙方の打ち上げを見て玩具花火を考案し、1717年(享保2年)に水神祭の余興として献上花火を打ち上げたのが納涼花火の起源とされています。この水

神祭とは現在でも宗教行事として行われている「施餓鬼」に関係があるとされており、当時、人びとの生活と密着していた大川(隅田川)の川開き(旧暦5月28日〜8月26日までの納涼期間)の期間に川で水難事故が起きないように施餓鬼を行い、亡者や無縁仏等の霊に食べ物、飲み物などの供物を施し無事を祈った行事です。特に1733年、將軍吉宗の時には前年大飢饉に襲われ、コレラが蔓延して多くの死者が出ました。この時には悪霊退散の願いを込めて、花火が盛大に行われたようです。現在、長崎県で送り盆の精霊流しの際、爆竹などを盛大に鳴らす風習も何らかの関係があるのかもしれない。また、1786年に塩素酸カリウムが発見されたことで花火に色々な色が出せるようになり、日本での色彩豊かな花火は1879年以降とされています。

日本橋横山町に初代鍵屋弥兵衛が店を構えてから6代目の時(8代目の説も)、番頭の清吉(清七との説も)がのれん分けを許され、両国吉川町に「玉屋」を開業します。以降、この2軒で両国橋の上下流を二分して「玉屋」・「鍵屋」の競演と共に有名な掛け声が定着します。しかし、実は「玉屋」はその後、失火により廃業。営業期間はおおよそ30年といわれ、鍵屋は戦前まで続いたとされています。